
特集 2 ここまで治る脳卒中と認知症

【巻頭言】

梶 龍 兒 (徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部感覚情報医学講座臨床神経科学分野)
勝 瀬 烈 (徳島県医師会生涯教育委員会)

ある新聞報道によると20年後のわが国では、地方ばかりではなく都市部でも医師不足が深刻になるとされている。人口が減って、医師数は確実に増える中、なぜ?と思われる方も多いと思う。実際の医師の数は人口ではなく医療ニーズによって決まるので、これからわが国で高齢者が爆発的に増えれば、確実に不足するわけである。高齢者で多い病気で社会的に負担が大きい病気の代表格に脳卒中と認知症がある。例えば脳卒中は全国の死因統計では、癌と心臓病につづく第3位であるが、死亡しなくなった分後遺症に悩む方が急増している。脳卒中後遺

症にかかる介護保険は年間2兆円を超えている。事業仕分けも大切であるが、脳卒中を早期治療して後遺症を少なくしたり、後遺症を治す治療を開発することが日本だけではなく高齢化が進む先進諸国ではきわめて重要になる。

本特集では脳卒中の予防や急性期から慢性期の後遺症の治療までと認知症治療の最前線について専門家の先生方にご執筆いただいた。この特集が医療従事者の方々に必ずや、お役に立てると自負している。